

# コミュニケーション力を育成するダンス教育の試み

－ 高校の部活動の指導実践より －

The trial of the dance education which raises ability of communication

－ Instruction practice of club activity of a high school －

次世代教育学部学級経営学科

筒井 愛知

TSUTSUI, Yoshitomo

Department of Classroom Management

Faculty of Education for Future Generation

キーワード：ダンス，集団形成，コミュニケーション力，部活動

**Abstract** : With the teaching method of the dance club of a high school, it did not set it as the first target that every student's dance made progress, but performed activity which makes students' human relations. The technique of performing pointing out faults by all members of "howing to each other" is developed, and all members were made to be concerned with all the works of extracurricular activities.

As a result, the student's ability of communication improved and the technology of the dance also improved. It was able to practice through the dance that it leads to good human relations that he is conscious of it being an existence where each takes mutually and which is meaningful. If the technique can be employed efficiently at other schools, it will become possible to aim at progress of a student's communication power.

**Keywords** : Dance, Group formation, Ability of Communication, Club activity

## 1. はじめに

本研究で取り扱うのは、居場所作りやグループワークの手法を取り入れることでコミュニケーション力を育成することを目的としてダンスという活動を利用する方法についてである。

ダンスという表現活動は、教育の力で直接の人間関係を結ぶ力を育成する上で、理にかなった有効な手段であると考えられる。なぜならば、創作や練習や発表などの様々な段階で、直接他人と関わらざるを得ない場面を、指導者が設定しやすいからである。筆者は1999年より居場所作りや相互承認の仕組みを取り入れたダンスの指導を続けてきたが、その中で部員同士が関わる仕組みを確立し、生徒だけで自律的な活動ができるようになった。

本研究で対象となっている集団は、岡山県立鴨方高等学校ダンス部と、浅口市総合型地域スポーツクラブ

に所属している、小中学生で構成されているダンスチーム「舞友団（ぶゆうだん）」である。鴨方高校のダンス部は1999年2月に愛好会として発足したが、筆者は愛好会の立ち上げに関わり、以後2008年3月まで講師として指導に携わり、その後も定期的に関わっている。現在の部員は1年と2年の男女12名である（うち男子生徒2名）。

一方の舞友団は2008年5月に発足して以降指導に携わっている。現在のメンバーは小学3年生から中学3年生までの女子42名である。

## 2. 研究の背景

岡山県には全日制の高校が80校あり、うち30校にダンス部がある（平成23年度）。このうち「岡山県高等学校ダンス協議会」に加盟しているのは24校である。岡山県高等学校ダンス協議会は高等学校芸術連盟（高

芸連)に所属している。全国のダンス部の組織は都道府県ごとに異なっていて、高体連に所属しているか、高芸連(関東地方では高文連という)に所属しているかが統一されていない。このため、全国的に統一された高校ダンス部の大会は高校総体にも全国総合文化祭にもない。文化部か運動部かは高校によっても異なっている。

岡山県内での公式の大会は6月にホールで行われ一般公開される発表会であるが、これは「岡山県高等学校総合文化祭ダンス部門(総文祭)」という位置づけである。総文祭には他に、写真、絵画、吹奏楽、演劇、伝統芸能、囲碁など様々な部門があり、県内の文化部の合同発表会となっている。これらの発表会は同時に、全国高等学校総合文化祭への予選となっており、優秀な作品は岡山県代表として全国大会へ行くことができる。

ところが、ダンス部門だけは全国大会にダンス部門がないため、岡山で発表会を行っても、優秀な作品が全国大会へ行くことはしない。

ダンスというジャンルの難しさとして、ダンスには様々なスタイルがあるため統一しにくいという事情もある。ジャズダンスやストリート系ダンスなどの、いわゆるリズム系ダンスもあれば、モダンダンスやコンテポラリーダンスなどの表現系ダンスもある。他にもよさこいなどの祭り系のダンス、盆踊りの現代版とも言えるパラパラなどもあり、異なるスタイルのダンスを一つの審査基準で評価することの難しさがある。

岡山県では5年前までは、この6月の総文祭が県の唯一の公式の発表会だったが、5年前から12月に「地区別ダンス交流発表会」が行われるようになった。こちらは公開されるものではなく、高校の体育館で実施される。

多くの部活動は運動部文化部ともに、全国大会を目指すことが一つのモチベーションとなっているが、岡山県内のダンス部に関しては、それがない。都道府県によっては、県の大会の優秀作品が神戸で行われる「全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)」の大会に推薦されるなどの仕組みを作っているところもあるが、岡山県にはそのような仕組みもない。また、一般公開される公式の発表会が年に一度しかないというのも、活動が盛り上がりにくい要因と考えられる。

このため、県内のダンス部はどの高校でも、独自に発表の場を開拓していく努力をしているが、私的な発表会や私的なコンテストなどに参加する場合には、生徒会から予算が下りないなど参加の条件が厳しい。

他にも、県内にはダンスを指導できる教員が少なく、生徒だけでの活動を強いられることや、高校によっては練習場所が屋外のみという環境の高校もあるなど、全体として部活動としては恵まれているとはいえない状況にある。この状況は、この十年間で大きな変化はない。

一方部活動以外のダンスを見ると、県内のダンス教室の数は増え、ストリートでの練習場所も増えている。またダンススクールの発表会やコンテストなどの数は、この十年で増加している。テレビのタレントなどの影響やダンスという趣味に寛容な世代が親となってきていることなどを背景に、ダンススクールでは低年齢化も進んでいる。また来年度からは中学でのダンスの全員必修化が始まる。

さらに最近では、ニコニコ動画がきっかけでダンスを始めるものも多く、スクールに通ったり特定のグループに所属したりしなくても、緩やかな関係性の中でダンスを楽しむことも可能である。

これらの世代がやがて高校に入学したときに、高校の部活動でダンスをする意義が従来とは変わってくることも予想される。

### 3. 鴨方高校ダンス部の発足当時

筆者が非常勤講師としてダンスの指導を始めた1999年当時、ダンス部の中でおきていたトラブルは「自分の練習にばかり集中して周りが見えない」「その日の練習に誰が参加するのかが不明確」「他のチームへの配慮がなくお互いに反目」「部活優先で他教員から非難される」などであった。他校のダンス部の見学にも行かせていただいたが、似たようなダンス部は他にもあった。

これらの部活には共通した練習のやり方が見られた。それは、「各自が練習して上達する」「チームごとに作品を創作したり練習する」など、「自分が上達したい」「自分の作品を完成させたい」という思いが先に立ち、他者と関わらずに個人個人の活動を優先していたことである。

しかし、ダンスはソロ作品以外は集団で一つの作品を創り表現するものである。また部活の文化祭公演などは、部員全員が一つの時間枠で発表をする。一人一人の思いを優先しては気持ちがばらばらで仲が悪くなるのは自然の流れであった。

このため、「自分が踊れるようになる」ということを優先するのではなく、「一つのステージを作り上げ

る仲間」としてお互いを尊重しあえるよう、「関係作り」に重点をおくことを心がけるようになった。

そんな中で着目したのは「ダンスは関わりの芸術」であるということであった。これは、色々なものと関わりながら作品ができて行くという意味でもあるし、「関わり様」そのものが作品になるという意味である。

まずは自分の身体と関わり上手にコントロールできなくてはならない。そのために様々な基礎トレーニングをした上で、振付どおりに動けるようになる必要がある。二番目に、その動きを音にあわせて動けるようにならなくてはいけない。三番目に周囲の空間を上手に使って踊らないと、狭くて小さい動きになってしまう。四番目にチームメンバーの動いている様子も意識しないと全体での一体感が生まれなため、一緒に踊っている他者との関わりを意識する必要がある。五番目に、そうしてできた作品を観客に関わりながら表現していく。このような五重の関わりの構造を常に意識しながら指導するようになった。

#### 4. ダンスと人間関係

ここでは、指導者のいない部活動とダンススクールとニコニコ動画のそれぞれで、メンバー同士がどのような関わりを持っているかを模式的に考えてみたい。

##### a. 指導者のいない部活動

指導者のいない他校のダンス部の活動を見に行くと、活動は三年生の部長の指示のもとに行われることが多い。しかし、先輩が後輩を指導するといった場面はあまりなく、高校によっては、他の学年のこと

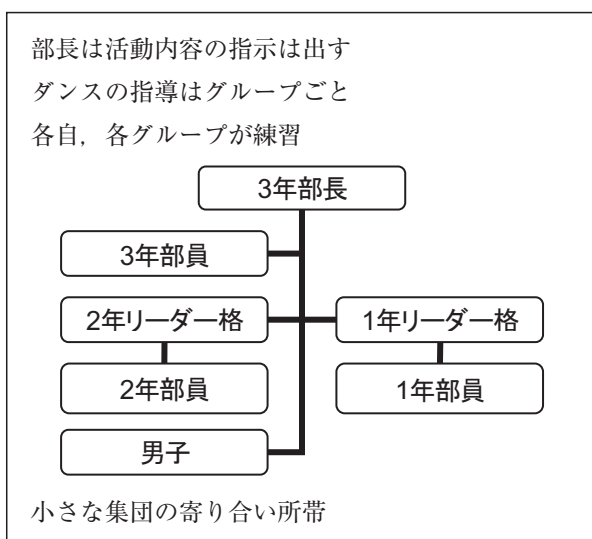


図1 指導者のいない部活動

についてお互いにほとんど知らないといった部活もあった。活動は作品のグループ単位で行っていて、それぞれのグループ同士はお互いにあまり関わっている様子はなかった。

これは総文祭のような高校ごとの発表会でも同様で、持ち時間を三つに分けて、各学年が順番に踊るといったスタイルが多かった。

このため少人数集団の寄り合い所帯といった様子であった。

##### b. ダンススクール

ダンススクールでは指導者の指示のもとで活動が行われる。このため、先生と生徒の間には強い絆が生まれるのだが、生徒同士で何かを決定するといった場面は生み出されにくい。またこの方法だと、ある人数を超えると、一人では把握しきれなくなってしまう。

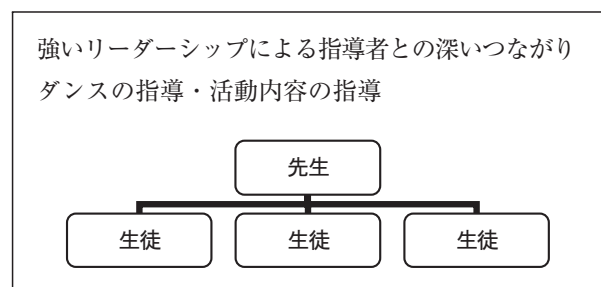


図2 ダンス教室

##### c. ニコニコ動画

参考までに最近登場した動画投稿サイト「ニコニコ動画」を交流の場とするダンスの場合も考えてみる。

2009年よりネット環境が発達したり、動画の撮影や編集が手軽にできるようになったため、動画投稿サイトに多数のダンスの動画が投稿されるようになった。その動画を見た者は、それをお手本にその振付をマスターしたり、振付をマスターしたものがオフ会を開いて交流したり、その様子を動画に撮影して投稿するなどの活動が行われている。

このような方法だと、他者と強い関わりを持たなくてもダンスを楽しむことができ、これまでとは全く別のダンスコミュニティが生まれる可能性がある。これまでのダンスが直接人と関わらざるを得ないものであったのに対して、インターネットを介してダンスを共有するという新しいダンスのあり方が生まれている。

(深い関わりがなくても踊れる)

振付を動画投稿サイト「ニコニコ動画」にアップ  
動画を見て振付を学習

SNSのミクシィのコミュニティで打合せ

合同でオフ会(集まって一緒に踊る)

創作物(撮影動画)は「ニコニコ動画」にアップ

図3 ニコニコ動画のコミュニティ

鴨方高校ダンス部の指導をする際に、指導者のいない部活動でもなく、強い指導者型でもなく、部員同士が関わりながら活動を進めていくために、同じ舞台芸術の部活である演劇部や吹奏楽部が参考になった。これらの部活動では先輩が後輩に指示をしたり指導をしたりといった関わりができていたからである。

## 5. 指導方法の概要

筆者が行ってきた指導の特徴はグループワークや居場所作りの手法を取り入れたところにある。

指導方法には八つのポイントがある。

### (1) 創作はメンバー全員で行う ～自分が踊る振付は自分で創る～

ダンスの活動の中心は、作品創りと踊ることであるが、ダンスの初心者には振付が苦手な者が多い。音楽でいえば、楽譜があれば演奏することができる人でも、いきなり作曲するのが難しいのと同様である。このため、振付の作業が一部の者に偏る傾向になる。しかしそうすると、創作に行き詰ったときに創作の担当者の負担が大きくなり、また一方で他の者は、創作の初期には振付ができるのを待つだけの状態になり、日々の活動がアンバランスになり、メンバー間で溝ができてしまう。

そうならないようにするために、その作品を踊るメンバー全員が創作に関わるようにした。全員がテーマのアイデアを出し、曲を持ち寄り、振付を考えるようにした。そうして時間を共有して相談しながら創作することで、全員の気持ちも一つになるし作品のイメージも共有しやすくなった。

このようなメリットがある反面、この手法だと個人の作家性が発揮されにくい。このため作品全体の方向性を統一するために、お互いが創った振付は後に述べる「見せ合い」という方法でお互いにチェックするようにした。

### (2) 全員によるダメ出しシステム ～人に見られて上達する～

各自が練習をしたり各チームが練習をして、本番だけ合同で舞台に出るのでは、一体感は生まれない。自分以外のメンバーがどんなレベルなのかをお互いに知り、お互いに伸ばしあうことで、集団としてのまとまりが生まれてくる。

このため、作品のチームごとに部員全員の前で踊り、見た者全員が一人ずつダメ出しをすることにした。全員で踊る作品なら、作品内のパートごとに分けるなどの工夫をした。最初のうちは、自分が踊る作品の練習時間を削って自分が踊らない作品のために時間をかけることには戸惑いがあったが、次第にお互いにとって大切な時間となっていく。

「見せ合い」には三つの基本ルールをもうけた。

- ・良いことと悪いことの両方を探してコメントする(必ず両面あると考えてみることで、ダンスに対する見方が深まる)
- ・改良のアドバイスを具体的にコメントする(単なる批判にならないように配慮することで、相手を思いやることにつながる)
- ・今見た作品の出来についてコメントをする(練習態度などの作品に直接関係のないことなどに関連させて言わない)

一年生は最初は「良いこと」しか言えない。これは、そもそもダンスを始めた頃は、どんなダンスもうまく見えてしまうからであり、また先輩に対してネガティブな発言をするのがしんどいという事情もある。

しかし先輩たちの発言を聞いているうちに、それぞれ独自の視点が育まれ、同じ作品を見ても色々な見方があるということが理解できるようになる。また、批判とアドバイスは違うということもわかってくる。

### (3) 一人一人に役割を与える ～仕事を割り振れば各自の力が発揮される～

部活では、よく行動する部員が色々な仕事を一手に引き受けてしまい、他のメンバーはその人にお任せしてしまう状況が生じやすかった。その結果、作品の進捗状況を他のメンバーが知らないということにもなっていた。そこで、作品に対しての責任を持ってもらうために考えたのが仕事の割り振りである。

踊りは上手いが振付は苦手など得意分野は人それぞれである。そこで全員が何かしら得意なことを発揮できるようにと色々な役割を考えた。

テーマ選び、選曲と曲編集、衣装や髪型の決定、振



付や踊り込みなどの創作活動以外にも、文化祭だと照明案、アナウンスやその原稿、音響設備や音源の準備、照明機器の操作、ポスターや舞台美術の製作、マネジメントなどなど色々な活動が考えられる。

また文化祭では少人数のチームが複数参加するので、各チームにリーダーを決め、進捗状況を報告させチームごとの事務作業などを任せた。

#### (4) 1年生も振付に参加する ～初心者のアイデアが作品の幅を広げる～

初心者は、教わった振付を踊ることは出来ても、振付を創作できるようになるのには時間がかかる。そこで一年生が振付方法を習得するための仕組みを考えた。

入部して最初の舞台は6月の総文祭だが、このときは一年から三年までの全部員が一つの作品を踊るので、二年三年が創作班と基礎練習班に分かれて、振付は創作班が行うことにした。一方基礎練習班が一年生に柔軟体操や身体の使い方やリズムのとり方などの基礎練習を教える。振付ができたところから、振付班が全員に振り移しを行う。

次の舞台は8月に全員で踊る祭り系のコンテスト「うらじゃ」である。この作品は6月下旬から創作するのだが、1年生にも振付の手法を簡単に教えて、短いフレーズを自由に創らせた。それを集めてつなげるのは上級生の役割である。先輩は後輩の考えた動きを否定せず全て受け入れ、上手に修正しながらアレンジしてその動きを取り入れることで、後輩は次第に振付のこつを体験的に学んでいくことになる。それだけに先輩の力量が問われる方法である。

そうして、10月の鴨高祭（文化祭）では一年生だけで曲選びから衣装や振付までを創作することにした。さらに12月の地区別発表会では、文化祭の時によかった二年生の作品を一年生も参加してリメイクして踊ることで、上級生の創作のコツなどを吸収する機会とした。

#### (5) ミーティングを大切に ～作品創りよりはまず関係作り～

日々の部活では創作や練習などの時間が大半であるが、このため定期的にミーティングをしないと、気持ちのすれ違いなどがあっても気づかないで本番間近に不満が爆発してしまうことがあった。そこで、大切なことを決めなくてはならないときは、全員でミーティングをすることにした。作品に関わることはもちろん、活動のルールなど部活の方針に関わることには全

員が関わり、部員全員に活動の全体像を把握させ意見も求め参画するようにした。

一方、メンバー間のトラブルや心のすれ違い、部活を辞めたいと考えている部員がいる場合なども全員で話し合った。トラブルが起きると、お互いの温度差が大きくなってしまううちに早めのミーティングをしないと、こじれてしまい作品創りが上の空になってしまうからである。場合によっては学年ごとのミーティングをすることもあった。

本番間近で一時間でも多く練習時間に使いたいときでも、作品創りよりは関係の修復を優先すると、その後の作品創りも短い時間ながら集中してうまく行うことができた。

#### (6) 部長は全員による選挙で決める ～直接選挙が生み出すリーダー～

部長は、部活全体をまとめたり、事務作業などの裏方の仕事をしたり、活動場所などについて教員に交渉したりなど、ダンス以外の能力が必要になる。そして何より他の部員から支持されなくてはならない。そこで部長・副部長は選挙で決めることにした。

部長を決める方法には、教員が決める方法や、学年内で決めさせる方法など色々考えられるが、部活の代表者を決めるのであるから、全員による直接選挙にした方がその後の運営がやりやすくなるだろうと考えた。

代替わりの時期は秋にある文化祭の終了後。有権者は1年生～3年生の全員。候補者は1年生2年生全員とし立候補制にはしなかった。立候補にしなかった理由は、立候補では支持される人が立候補しないケースがあったり、立候補者以外の部員が人任せになってしまいがちだからである。このため、開票するまでは誰が部長になるのかは誰にもわからない。

部員は自分が一年間ついて行きたい人、後を任せられる人を真剣に考えて投票に臨む。そうして決まった部長は、責任も重いが多くの人の応援を得られる。

#### (7) 指導者の相対化 ～主体は生徒～

部活動の主体は生徒である。その生徒集団を様々な直接の指示によってコントロールする方法もあるが、そのためには、毎日部活に付き合う必要があるし、生徒との距離のとり方が非常に難しいものとなる。また、指導者が転勤などでいなくなった場合、一気に部活が衰退してしまうことにもなりかねない。このため、主体性を育てることと生徒の感性を生かすために様々な工夫をしたが、基本的には生徒のやりたいこと

を尊重して、自分はファシリテーター役に徹した。

例えば、筆者が指導者として部員全員に指示をするときは、まず部長に話をし相談した上で、部長から全体に指示をさせることを心がけた。部活に行くとき「今日の活動内容は？」と部長に聞いて、その日の段取りを確認するようにした。

#### （８）持続可能な部活動 ～先輩から後輩への文化の継承～

長年にわたり活動が続ける「持続可能な部活動」にするためには、指導者がいなくても活動できることが重要で、そのために「先輩が後輩に文化を継承していく仕組み」を考えた。

初心者１年に動きを教えるのは２年生の役割で、３年生はその様子を見ながら、指導方法を２年生にアドバイスしたり、練習の方法を１年生に伝える。このような関係を学年があがっていくたびに続けることで、文化が継承されていく。

指導者として心がけたのは、先輩がやった方が早く済んで楽な場合でも、後輩を教育しながら進めさせたことで、そのときは面倒でも、後々生徒だけで活動するときの力になり指導も楽になっていった。その結果「仲間と共に時間と場所を共有し、共通の目的のためお互いを承認し、その活動の結果としての作品が、客すなわち社会に認められる」という活動形態が定着した。

以下の図は、ダンス部員の三年間の活動サイクルである。学年が進むにつれて、学年間の関わりの中でより高い課題を設定した。また、二ヶ月ごとに作品発表の場を設けることで、日々の活動目標を持ちやすいようにした。それぞれのステージの活動目的を各学年ごとに考え、その目的を意識した活動となるような関係作りを心がけた。

## ６．舞友団の活動

浅口市から総合型地域スポーツクラブの指導の依頼を受けたときに、鴨方高校での経験を生かして、通常のダンススクールのようなスタイルではなく、メンバー同士が協力して作品を創ったりお互いに教えあったりする方法を取り入れることにした。これは、学校も小学校六校と中学校三校から集まってきたし学年も幅広いため、早く仲良くなって欲しいという思いもあったし、そもそも単に教わりに来るだけの習い事ではなく、自分で考え自分で行動できるようになって欲しかったからである。

人間関係を生み出すためには、振り移しの後に二人ペアになってお互いダメ出しをする練習方法や、グループを半分に分けてお互いに見せ合いをする方法などを取り入れた。

作品創りも一年目は全て指導者が創作したが、二年目からは子どもが創作する場面を作り出していった結果、４年目は４割以上が自分たちで作品創りに取り組むようになった。

三年目の昨年は、鴨方高校との合同の練習合宿で、高校生と小中学生の間で見せ合いをすることにした。小中学生は最初は高校生に意見を言うことはなかったが、後でこっそり聞いてみると「隣の人を見ながら踊っている人がいました」「上半身は勢いがあつたけど下半身がおろそかになっていました」「ターンが逆回転の人がいました」など実によく見ているのである。それを高校生に伝えると「全部自分たちが気にしていた部分を言われました」と言い、その後のより集中した練習へとつながった。小中学生も高校生のダメだしを神妙に聞いていて、練習に生かしていた。また翌日には小学生が高校生に対して意見が言えるようになっていた。これは、ダンスに年齢の壁はないし、お互い向上したい者同士であれば、信頼関係が自然に生み出されることを示している。

	6月	8月	10月	12月	2月	3月
	総文祭	うらじゃ	文化祭	地区別発表	校内発表	単独公演
	全員作品 (表現系)	全員作品 (祭り系コンテスト)	小品と全員作品 (リズム系)	小品と全員作品 (表現系とリズム系)	小品など (全ジャンル)	全作品 (全ジャンル)
1年	初めて踊る	初めて振りを創る	初の自分たちだけの作品を創る	先輩の小品を教わる	一年間の集大成	技術の向上
2年	初めて指導する	主体的に創作する	小作品と全員で踊る作品の創作	最上級生となる	一年間の集大成	公演の運営
3年	部活の運営	全体作品の統括	最後のステージ 後輩への引継ぎ	引退してOB・OGとして関わる		

図４ ダンス部三年間の活動サイクル

## 7. 鴨方高校での成果

「見せ合い」の効果を見るために、2011年の文化祭に向けての練習過程でアンケート調査を行った。「見せ合い」は創作の途中（本番の20日ほど前）に一回、作品が完成した段階（本番の10日ほど前）に衣装も着て一回と、最低二回は実施する。その作品に出ないメンバー全員が、一年生から順番にコメントをしていき、最後に部長がコメントする。指導者が同席している場合は最後に指導者がコメントする。作品を踊ったメンバーは自分のダンスノートにそのコメントのメモを取る。

創作中の一回目は振付や構成などの創作内容に関するコメントを主に行い、完成後は踊り方や技術などの表現力に関するコメントを行う。20人の部員が6チームの少人数グループに分かれて作品を作っている場合、二時間程度の時間がかかる。

見せ合いを行った後で、誰からのどんなコメントがその後の自分たちの作品創りに役に立ったかをアンケート調査した。また、見せ合いの様子をビデオに撮影し、コメントする様子も記録した。

今回のアンケートで、役に立ったアドバイスは

「その作品に入り込むことが大切」

「踊っている二人だけが楽しそう」

「表情や足音や目線など自分では気づかないこと」

「もっと大きくステージを使ったほうがいい」

「一人一人がばらばらに踊っている感じ」

などの具体的なアドバイスが役に立っている。また、求めているコメントは

「自分の悪いところ、直した方がいいところ」

「改善方法」

「自分ではできているつもりで、できていないところを見つけてくれるところ」

「具体的な細かいチェック」

「良かったことと悪かったところの両方」

などで、お互いに必要なコメントをお互いに分かり合っていることが伺える。

またこの一年の部活を通じて、「中学までは自分の意見を直接言えず、他の人に伝えてもらったりしていたが、ダンス部で活動するうちに直接言えるようになった（1年女子）」や「（以前は無理だったが）1年の女子に振付を教えられるようになった。（2年男子）」といった発言もあり、コミュニケーション力の育成に効果があったことがうかがえる。

また「あなたは振付を教えるのは得意ですか？」と

の質問に、「得意」0、「まあまあ得意」2割「少し苦手」7割「かなり苦手」1割と、苦手ながらもダンスを教える力が身につくことがうかがえる。

## 8. 今後の課題

今回、「見せ合い」にすっかり慣れている集団を対象に調査を行ったため、一般化する場合の問題点があり見えてこなかった。具体的にいえば、一年生や技術の低いもののアドバイスに対して、上級生や技術の高いものが素直に耳を傾けようとしない可能性や、自分の練習時間を削って他のチームの練習に付き合わされることに対して、進んで参加できない可能性などである。これらの課題をどのように解決するかという問題が一つ。

もう一つの問題は、部活動のように3学年が関わりながら作品創りを進めていくのと違い、体育の授業などに取り入れる場合の課題である。

これらの課題は、リーダー作りやグループ同士の関わりを演出することで、クラス内や授業内でも応用可能であると考えられる。また、練習時にペアを作って見せ合いをするなどの手法はすぐに応用が可能なため、授業などでも取り入れることができると思われるが、実際に中学や高校で試みるのが今後の課題となる。

現代は、直接の人間関係に不安を感じていたりコミュニケーションに苦手意識を持ったりしている若者が増加し、他人との深い関わりを待とうとしないままに社会へ出て行くことが危惧されている。そんな中、中学校体育の指導要領の改訂に伴い、ダンスが必修化されたり、文部科学省が「舞台芸術でコミュニケーション力を養成する活動」に二億円の予算をつけたりするなどの動きもあり、ダンスという活動は、単に踊って楽しいというだけでなく、より積極的にダンスという活動を活用することが求められている。

ダンスは、身体表現であり見てすぐわかるし、年齢性別で優劣がさほどないなど、よりプリミティブな活動であるため、様々な可能性を秘めていると考えられる。今後もダンスを通じた人間関係作りの手法を確立する研究を深めて行きたい。

## 参考文献

- 筒井愛知「高校の部活動と居場所作り～ダンスを通じた活動の実践より～」，田中治彦・萩原健次郎編著，『若者の居場所と参加～ユースワークが築く新たな社会～』，東洋館出版社，2012
- 筒井愛知「ケータイ・メディア教育の教材開発に関する研究～子どもの利用実態を踏まえたリテラシーの確立を目指して～」，平成22年3月，環太平洋大学紀要